

# まほ野球

この本は、まほやくキャラの(概念)打順を考えることに執心している筆者の考えた雑野球パ口本です

マエケンの「オズが4番ならミスラは1番」という言に「いやいやいや…」と一家言ある人向き

特別カップリングとかはないんですが、書いてる人はカイオエとルチミスで最良は燕のオタクです  
よろしくお願ひします

## 全部与太話！

## 概念打順解説～キャラ語り編～

### オズ

伝説の二刀流。数々の記録を塗り替えた超人。外野も守れるけどちょっと苦手。(走りたくない)

現在は監督をやっているが、本人は何もしていないのに乱闘騒ぎに巻き込まれてよく退場になる。

### アーサー

名門校出身のエースピッチャー。150キロ台の高速ストレートとよく落ちるフォークが武器。オズ様の弟子。

### カイン

センターで守備範囲が広い。バッターとしては広角に打ち分けられ、二塁打が多いタイプ。足も速い。3周年ストでセンターとしてフライを取る時の心構えを語ってくれた気がする。(18話)

### リケ

ピッチャー。最近変化球をオズから教えてもらった。上手に投げられると嬉しい。

### スノウ

ピッチャーだったら先発、野手ならセカンドかショート。(双子二遊間を…)

オズとフィガロはワシが育てた。

ピッチャーだとしたら変化球多めで、なかなかストレートか変化球が見極められないタイプのピッチャー。

### ホワイト

ピッチャーだったら抑え、野手ならセカンドかショート。(双子二遊間はロマン)

オズとフィガロはワシが育てた。

抑えなのは双子の継投りレーが見たいじゃん？というロマンなのだが、なんだかんだ抑えてくれそうな感じがある。

## ミスラ

打順は1番じゃなくて3番あたりにおきたいし、なんなら4番タイプだと思う。  
(マエケンとの解釈違い)

守備はあまり上手くないが、ファーストでサードルチルからの魔送球をがっちり受けてほしい気持ちがある。怠慢走塁で怒られがち。

## オーエン

ピッチャーだったら変化球多めの左の中継ぎ。ワンポイントで働いてくれそう。  
野手だったらセカンド(直感)

## ブラッドリー

元相棒絶対二遊間だと思ってたんですけど、最近バッテリーかもって思ったのでキャッチャー。リードが絶妙。できそうだと思ってるピッチャーにはスリーボールでもきっちり内角要求してきそう。

## シャイロック

左の軟投派。打てそうなのに打てない球。投球フォームが独特の美しさでファンが多い。

## ムル

フトワークの軽さでショートだ！ 打席ではバッテリーとの心理戦を得意としており、ヤマを張るのがうまい。スイッチヒッター。

## ラスティカ

監督枠だけど5番サードのイメージ。周りがよく見えてる。乱闘になると端っこの方で「おやおや」って見てる。

## クロエ

ファーストかサードかなあ…。打順は8番。ラスティカを師匠と仰いでいる。ユニフォームの着こなしがおしゃれでファンが注目している。

## ファウスト

ピッチャー（先発）。昔フィガロとバッテリーを組んでた。学生時代から将来を囑望されていたがイマイチ運がない。声大きいし足も速い。昔はエースで4番だった。

## ネロ

元棒二遊間だと思ってた（時はセカンドだった）けど、バッテリーかなという気持ちになったのでピッチャー。コントロールが良いが、満塁スリーボールでも内角を要求しているブラッドリーとはもう組めないと思っている。ファウストの勝ちを消さないようにしないと、とマウンドに上がる中継ぎ。

## シノ

外野（ライト）。俊足好打で1番か2番に置いておきたい。長打は少ないが足があるので塁に出したくないタイプ。本人は長打を狙ってくるのでツーストライクまでは振らせよう。でも、選球眼も良い。

## ヒースクリフ

ピッチャー。普段の雰囲気と違って投球は力で押すタイプ。ここぞという時の四死球が課題だったが、ファウストの助言もあって、攻めの投球ができるようになってきた。

## フィガロ

ピッチャーかキャッチャーか迷ったんですけど、キャッチャーかな…。(性格が悪い方がキャッチャー向き説)

昔ファウストとバッテリーを組んでいた。バッター心理を読んだ配球が得意。打つ方は小技がきくタイプ。

## レノックス

絶対ファーストだと思っていたが、3周年ログストの走力を見て勿体なくなっちゃったので外野かなあ…。内外野守れるユーティリティプレイヤー。キャッチャーも昔やっていたが、フィガロに性格が良すぎるから向いてないと言われて辞めた。5、6番に入れたい。長打もあるし、チームバッティングもできそう。

## ルチル

サード。返球が魔送球気味だが、ボールへの反応が良い。フルスイング一発がありそう。逆方向にも打てる。実は見た目より足が速い。

## ミチル

ピッチャー。リケが変化球を教えてもらっているのにフィガロが変化球を教えてくれないのが引かかっている。打つ方も結構得意。後述の打順考察はピッチャー多すぎたな…と思ったので兄と同じサードを守ってもらった。

## 概念打順解説～実践編～

被りなし2チーム作ると思ったんですけど、ピッチャー増やしすぎたので被り考えずに2パターン作ってみました。(DHあり)

1 (右) シノ

2 (中) カイン

3 (一) ミスラ

4 (左) レノックス

5 (DH) ラスティカ

6 (三) ルチル

7 (捕) フィガロ

8 (二) ホワイト

9 (遊) スノウ

投手

(先発) アーサー

(中継ぎ) ヒース

(ワンポイント) オーエン

(抑え) シャイロック

打順

1番2番で塁を埋めて3番4番で返すという定番の打順。下位もルチルのパンチ力とフィガロのバントで繋がる打線。

割と硬めな守備という感じがする。投のチームですよこれ。

投手陣

シャイロックは絶対抑えだと思んです…!!!

魔法使い両利きが多いけど、右右左左かなあ…。

1 (左) レノックス

2 (捕) ブラッドリー

3 (遊) ムル

4 (DH) オズ

5 (中) カイン

6 (二) オーエン

7 (右) シノ

8 (一) クロエ

9 (三) ミチル

投手

(先発) ファウスト

(中継ぎ) リケ

(抑え) ネロ

打順

オズ様で一掃を期待した打順。割と攻撃重視のオーダーかも。センターラインが固め。1番にレノックスを置くことで下位からも点が取れるように…。

投手陣

ファウスト先生、絶対「気持ちの籠った投球」って書かれるタイプだから…。ネロが抑えなのは、「封印が得意→鍵を閉めるのが得意→抑え」という発想です。

## ここからは小説です。

設定のようなもの

ネロ（ピッチャー）

大学卒業後ドラフト2位で入団。学生時代はブラッドリーの後輩。（1年違い）

学生時代は中継ぎが多かった。プロになった当初は先発に志願したが、再びリリーフに。

コントロールが良いが、焦ってくるとストライクゾーンに入らなくなる投球を気にしている。

学生時代はブラッドリーとバッテリーを組んでいたが、最後の試合まで彼のリードに一度も首を振らなかった。ただの一度はブラッドリーの学生時代最後の試合である。

ファウスト（ピッチャー）

高校卒業後ドラフト1位でネロと同期入団。高校時代はエースで4番、将来を期待していたが、最初の頃は怪我に泣かされた。

ボールのキレが良く、多彩な変化球が魅力。パワプロで「負け運」がつくくらい味方の援護がない。

ブラッドリー（キャッチャー）

大学卒業後ドラフト1位で入団。（ネロ・ファウストとは別のチーム）

強肩で四年連続盗塁阻止率リーグナンバーワン。打力もあり、球界ナンバーワン捕手と言われている。ネロの1年年上の先輩。今年FA権を取得した。

**全部与太話です。よろしくお願いします！**

あいつと組んでから何度酷い目にあつたかわからない。

「俺様のサインに首振んな」

入部早々あいつはそう宣言した。傍若無人、傲岸不遜。これらの言葉はあいつのためにある。宣言通り、サインに首を振ったピッチャーたちは皆マウンドを降ろされた。

それでも、俺は愚直にあいつのサイン通りにボールを投げた。それしかなかったからだ。

球速があるわけでも決め球になる変化球があるわけでもない。でも、あいつのサイン通りに投げればバッターを抑えられた。

あいつのリードは容赦がなかったし、投げきれなければボロクソに言われる。それでも、投げ切った瞬間の興奮が忘れられなかったから、俺はここまでできてしまった。でも――。

(なんでだよ)

九回裏同点ワンアウト満塁フルカウント。犠牲フライでもスクイズでも、そして――押し出しても一点勝ち越しの場面だ。こうなってしまうえば目の前のバッターと勝負するしかない。こんな時、ピッチャーは孤独だ。

このシーンであいつが出してきたサインは右打席のバッターの内角いっぱいストレートだった。

(当てたら終わりだぞ。わかってんだろうな)

俺は初めてサインに首を振った。正直、首を振ればあいつがタイムを取ってマウンドに来るだろうと思っていた。そうしたら意図を問い詰めてやるう。しかし、あいつは平然ともう一度サインを送った。

内角いっぱいのストレート。

これまで首を振ったことのない俺が首を振っても、あいつは何一つ動揺せず同じサインを出す。マウンドにだって来やしない。その時初めて心が折れた。

俺の投げた球は高めに外れた。

「お疲れ様」

ロッカーでよく知った声が背後から聞こえた。同僚のファウストが俺の隣のロッカーに鞆を置く。

「先生もトレーニング？」

「ああ」

『先生』というのはファウストの愛称だ。呼び始めたのが誰かは知らないが、研究熱心な様子や教師のように小言が多



いところから付けられたものだった。チームメイトは尊敬と揶揄いを込めて呼んでいる。

「オフはゆつくり休めた？」

「ぼちぼちなな」

シーズンが終わってから短いオフを取り、先週から自主トレを再開している。俺は例年のように球団のトレーニングルームに来ていた。最近では地方や海外で自主トレをする選手も多いけれど、俺はシーズン中と変わらず球団施設を借りている。先生も、後輩を集めたり先輩を頼ったりして外部で自主トレをするタイプではなく、シーズン後にロッカールームで会うのはいつものことだった。

先生と俺は同期入団で、高卒の先生と大卒の俺は年齢だとちょうど四歳差だ。球団施設で自主トレをしている選手は若手が多いから、七年目の俺と先生は自然と浮いていた。

「俺はうかうかしているとあつという間に落とされるからさ」

「去年はキャリアハイだろ？」

「まあ、そうだけと……」

一勝四敗十一ホールド二セーブというのが俺の昨シーズンの成績だった。中継ぎに転向して三年目にしてキャリアハイだが、満足のいく成績ではない。二度ファームに落ちながらもなんとか一年一軍で投げられたのは良かったし、勝ちが見

える試合で出してもらえるようになった。それでも自分のせいで負けた試合が四度ある。

「抑えをやりたんだろ」

それは中継ぎに転向が決まった時の俺のコメントだった。

試合の頭で投げる先発ピッチャーと試合の途中から継投で繋ぐリリーフピッチャー。リリーフピッチャーはどの場面も難しく重要ではあるが、やはり九回を投げる抑えというのが頂点だ。コメントを求められれば、誰だってそう答えるものだろう。

「俺は抑えは向いてないよ」

「どうして？ 大学の時は抑えだっただろ？」

「メンタルが弱いから」

自嘲する。確かに学生時代は抑えをやっていたこともある。しかし、その時の経験こそが、抑えには向いていないと強く自覚させた。

「そうか」

先生はそれ以上強く言わなかった。こういうところがこの同期のやりやすいところだ。

「まあ、人のことを言っている場合じゃないしな」

先生は着替えるとロッカーを閉めた。

四勝六敗。今季のファウストの成績だ。年間通してきっち

り仕事はしていたと思うが、なかなか勝ちにつながらない。

それでもチームメイトに当たることもなく、黙々と投げ続ける姿を俺は尊敬していた。ああいうのがいわゆる心の強さというやつなんだと思う。

「先生はさ……。九回裏同点ワンアウト満塁フルカウント、ワンストライクスリーボールの場面で、内角いっぱいサインが出たらどうする？」

そんなことを聞いたのは、先ほどの会話で学生時代の記憶が蘇ったからだだった。

「そんなの首を振るだろ」

「だよなあ」

即答だった。

「僕なら打つてもファウルになる緩めの変化球を、ストライクゾーンからギリギリ外れるか入るかってところにに入れるかな。まずはカウントを整える」

「いや、ほんとそれ……」

心の底から賛同すると先生はふっと笑った。ほんの少し自嘲するようでもあった。

「あくまで僕の話だよ。きみにそのサインが出たのなら制球を信頼していたんだろ」

「えっ？」

「僕の場合はコントロールよりは球のキレと変化で振らせるタイプだから、カウントが悪くなってからギリギリのコースにサインを出すキャッチャーは少ない。でも、きみはコントロールがいい。信頼しているからどんな状況でも厳しいコースを要求できるってことなんじゃないかな」

『信頼』という言葉が口の中を苦くする。本当にそうだったのだろうか。

「信頼っていうなら、こんな気持ちにはなっていないよ……」

俺は小さくこぼした。あれが俺の投球への『信頼』だったらどんなに良かっただろう。けれど、あれはそんなもんじゃない。

あいつが持っていたのは、俺があいつの言うことを聞くという確信だ。

「信頼されないのも辛いけどね」

先生の声色がいつになく冷たく、固いものだったので俺は思わず背を向けた。

「ネロ！ ファウスト先生！」

ロッカールームに慌てたような声が響く。

「どうした？ ヒース」

今年二年目のピッチャーであるヒースクリフがスマートフォンを片手に駆け寄ってきた。

「二人とも球団のニュース見ました？」

「ニュース？」

この時期のニュースといったら移籍に関するニュースだろう。俺と先生はヒースの示した画面を覗き込んだ。

「なっ……!!」

驚いて息を呑んだ。所属球団のニュースリリースには新たに獲得した選手の名前が載っている。そこにあつたのは――。

「ブラッドリー・ベインか。よくうちが取れたな」

「前評判だと他に行くみたいでしたよね」

今年のFAの目玉は球界屈指の捕手、ブラッドリー・ベインだった。クレバーな配球と強肩が持ち味。大学卒業後、ドラフト一位指名で将来を期待されて入団し、それに見事応えてきた。

「ブラッドリーはきみの大学の先輩だっただろ？」

「ん、ああ……」

先生の言葉に俺は二つ返事を返した。

ブラッドリー・ベイン。

ネロが決して首を振らないと誓った相手。

学生時代、優勝のかかった試合で一度だけ首を振った相手。

そして、ボールが外れても、何一つ彼を責めずに卒業していった男。

「来季は俺たちの球を受けるんですかね」

ヒースの言葉に俺はぞっとした。あいつと再びバッテリーを組むなんて冗談じゃない。もう二度とあいつのサインなんて見たくなかった。もう二度と首を振りたくなかった。

ガンッと金属のぶつかる軽い音がする。無造作に閉めたロッカーの扉は思ったよりも派手な音が出た。

「悪い。俺先に行くわ」

二人から逃げるようにロッカールームを出る。そのくせ足はトレーニングルームには向かわなかった。

そんなわけで全部趣味のまほ野球ペーパーでした。  
12ページもあるのびっくりですね。私もびっくりです。

マエケンによるオズとミスラちゃんの打順考察（これどこのストーリーでしたっけ？ オズの爪痕？）から始まり、定期的に Twitter でまほやく打順の話をしていました。今年まほラジ第6回のお便りのおかげで打順の話をしている人をちょいちょい Twitter で見かけるようになり、まほ野球の時代…きたな…と思いました。

私はシーズン中、だいたい週6で野球中継を見ているオタクなので「好きなもの×好きなもの」が書いて楽しかったです。

10月くらいからずっと原稿し続けてきて、12月のイベントをようやく迎えてるんですが、途中からこの無配を書くために原稿を走り抜けていた気がします。

本当は魔法舎でリアル野球盤をする話を書きたかったのですが、全然尺と時間が足りなかったので、年末年始頑張ります。バラエティもかけっこもする魔法舎ならリアル野球盤くらい当然しますよね??

ここまで与太話にお付き合いいただきありがとうございました。

2022年12月 冬月藍

Idee/ 冬月藍

2022/12/18

<https://www.idee-novel.com/>

Pixiv: 35332263

Twitter: @ran\_f\_mhyk (まほやくの二次創作とか)

Twitter: @ranfuyutsuki(普段はここにいます)

あなたの考えたまほ打順是非こちらのQRコードに入れてください。私が嬉しいです。(ブログで紹介させてもらおうかもです～)

